

# 宮崎における女性史資料保存に関する研究（１）

A Study of Women's History in Case of Miyazaki（１）

四 方 由 美

本稿は、「宮崎における女性史資料保存の研究」として、宮崎における地域女性史の可能性を探ろうとするものである。

研究の背景として、歴史学において常に客体であった女性が、歴史の主体として認識されるようになった経緯を述べた上で、歴史学が地域史を焦点化する過程、地域の女性たちが自ら語り・記述・保存する地域女性史について整理する。

さらに、地域女性史の成果を地域別に比較し、成果が多くある地域の特徴を導き出すことにより、宮崎における地域女性史による女性史資料保存の可能性について探る。本稿では、女性史サークルの存在が果たす役割に着目し、愛媛県の２つの女性史サークルへの調査結果の考察をおこなった。また、宮崎において活動をはじめた女性史サークルの取り組みについても紹介する。

**キーワード：**女性史研究、オーラル・ヒストリー、女性学、地域女性史、女性史サークル

## 目 次

- I はじめに
- II 研究の背景
  - 1 歴史学における女性
  - 2 歴史の主体としての女性
- III 地域女性史という視点
  - 1 郷土史から地方史、地域史へ
  - 2 女性による女性史研究の萌芽と地域女性史の誕生
- IV 宮崎における地域女性史
  - 1 地域女性史の広がりとは女性史サークル
  - 2 宮崎における地域女性史の成果
- V 地域女性史への取り組み
  - 1 愛媛県松山市における女性史サークルの活動
  - 2 宮崎における女性史サークルの取り組み

## VI おわりに

## I はじめに

本稿は、平成20年度より宮崎公立大学地域貢献研究事業において行なっている「宮崎における地域女性史保存に関する研究」の一部をまとめたものである。本研究は、3年間の計画で実施されている。研究目的と3年間の研究計画を以下に示す。

## 研究の目的

- ① 地域女性史という観点からみた宮崎の現状を考察する  
地域女性史の成果が少ないのはなぜか、  
女性史学習グループがないのはなぜか、など。  
→地域女性史編纂の取り組みへの手がかりを探る。
- ② 地域女性史編纂の試みを行なう  
女性史研究グループを作り学習し、その成果を発表する。  
宮崎公立大学地域研究センターを中心に資料の保存を行なう。
- ③ 当該分野における本研究の位置づけ  
宮崎における地域女性史編纂に向けた基礎研究の一つと位置付ける。

## 研究方法

- ① 初年度（平成20年度）  
地域女性史の観点からみた宮崎の現状考察を行う。  
他の地域との比較 例）愛媛県松山市など。
- ② 2年度（平成21年度）  
「宮崎における地域資料のデジタルアーカイブに関する研究」  
（平成17年度・平成18年度地域研究センター助成研究）  
「宮崎における女性史史料保存に関する研究」  
（平成19年度地域研究センター助成研究）  
より、継続して女性史の聞き取り調査、資料保存を行い、女性史学習グループの学習を経て、宮崎における地域女性史編纂を試みる。
- ③ 3年度（平成22年度）予定  
2年度の成果を発表する。（発表会、報告書、単行本等）  
資料のデジタル化を行なう。

## II 研究の背景

## 1 歴史学における女性

従来、歴史学において、女性 は 歴史の脇役として存在してきた。それにはいくつかの理由がある。「歴史の書き手」は圧倒的に男性が多く、女性に関する歴史的記述が体系的に行われて来なかったことで史料が少ないこと、聞き取りが可能な近現代史においても、女性の語り（オーラル・ヒストリー）が十分に評価されてこなかったこと、そして何より、女性も歴史を作る上での行為主体であるという視点が欠けていたこと、などである。

例えば、「戦時下の体験」といえば、戦闘、空襲、原爆などの経験が多く語られてきた。男性の語り手による多くの史料に加えて、女性 は 銃後の協力という点において主に焦点をあてられてきただけである。いわゆる日常の経験、「生活」に関する事柄など、女性 が関わってきた部分は重要な史料としてとらえられてこなかった。

しかし、女性 もまた歴史の主体であるという観点から女性の歴史を再評価する動きとともに女性史研究の重要性が見直されている。また、女性だけではなく性別や性別に関わる問題を焦点化したジェンダー史の研究も始まっている。

宮崎においても、女性の経験については体系立った資料として保存されてこなかった。本研究は、宮崎における女性史資料保存にあたって、地域女性史という観点から検討を行ない、その実践につながるような活動を模索する。地域女性史の活性化によって宮崎における女性史資料のより多くの保存を実現したいと考える<sup>1)</sup>。

## 2 女性史研究の発展

欧米ではフェミニズムと女性史の発展は切り離して考えることは出来ないが、上野（2002）は、「日本女性史とフェミニズムとの出会いは不幸なもの」であったという。長野（2006）も同様に「欧米において女性史と女性学が、ジェンダー概念によりともに従来の学問体系へ挑戦していったのに対し、日本女性史研究者は、日本でいち早くジェンダー概念を取り入れた女性学研究者と同一歩調をとることはしてこなかった」と述べている。日本女性史はフェミニズムの登場を素直に受け入れることはできなかったのである。

上野は、その理由を二つ挙げる。第一に、「女性史が日本ではフェミニズムに先立って確立されていたこと」、第二に、「女性史が唯物史観の解放史の強い影響下にあったこと」である。

戦後女性史は三つの時期に分けることができる。第一期は「唯物史観の強い影響下に、井上清や高群逸枝の名著『母系制の研究』に代表される啓蒙的通史が解放史として書かれた」終戦から1960年代、第二期は「自分史や個人史、地方史などの個別的な実証研究が進んだ」1970年代、第三期は「女性史が確立してきた」1980年代以降である。

フェミニズムとの関わりを述べれば、第二期の女性史論争以降である。古庄（1987）は、女性史

論争を二つに分けている。第一は、村上（1970）の「女性史研究の課題と展望」をきっかけに起きた生活史派と唯物史観派の論争であり、第二は、水田（1973）の『女性解放思想の歩み』を契機としたフェミニズム派と唯物史観派の論争」である。この論争はその後の展開において、三つの対立軸に整理することができる。それは、生活史 vs 解放史、フェミニズム vs 生活史、フェミニズム vs 解放史の三つである。

第三期は、「女性史の確立」した1980年代である。上野は、第三期の女性史はこれまでの「解放史観」に比べて、はるかに多様かつ多義的であるという。第一に、「解放史から見たら暗黒の中世としか見えない前近代の女性史を、既存の資料を読み直すことを通じて、女性にとって肯定的な側面を含む多様な相のもとに浮かびあがらせたこと」である。そして、第二に、「近代の女性に対する両義性、解放と抑圧の両側面を明らかにしたこと」である。さらに、上野は女性史が「抑圧の歴史」から「女性の権力」の発見に向かったという。

例えば、女性の「被害者史観」から、女性の戦時下の戦争協力を問われる「反省的女性史」に求めることができるようになった。上野（1998）は、このジェンダー史におけるパラダイム転換は、「歴史に対する女性に責任を問う動きを不可避に伴うに至った」と述べ、女性にとって次のような結果を招いたとする。「新しい女性史」は、「解放史」が女性を歴史の受動的な客体として扱っているのに対し、女性を歴史の主體的な担い手とみなす立場をとっている点で共通している。そしてこの女性を「客体」とする研究から女性を「主体」とする研究へのシフトこそが、フェミニズム以後の女性史研究の特徴であった。それらの研究が女性の「被害」よりは「加害」を、女性の「抑圧」よりは「自律」をより強調することで、逆に女性の現実に対して容赦のない視線を向けるという皮肉な結果となった。

しかしながら、女性が歴史の主體的行為者となることは女性史研究の発展において大きな契機となると同時に、女性自身が歴史をつくる当事者として自己認識するために必要な過程であったといえる。

### III 地域女性史という視点

#### 1 郷土史から地方史、地域史へ

戦前においては、ある地域を対象とする歴史学の呼び方は、郷土史であった。郷土史はその地域の歴史を記述するだけではなく、郷土愛やナショナリズムと関連付けて捉えられるものであった。言い換えれば、郷土性が重視され天皇制ナショナリズムと結び付けられた歴史であったといえる。

終戦から1960年代前半にかけては、地方史という呼び方に变化した。行政による出版成果が多くみられ、その地域における歴史が幅広く紹介される内容となっている。特徴としては、中央の問題を地方でみるという態度を基調としていることであり、中央と対比しての「地方」ととらえる傾

向である。

1960年代後半以降になると、地域史という呼び方が登場する。中村政則は、1982年に「地域史の提唱」を呼びかけた（信濃史学会講演「地方史と全体史」）。中村は、郷土史→地方史→地域史の変化は単なる呼び方の変化ではなく「対象の変化、あるいは方法の転換を含んでいた」として「地域というのは、空間的、地理的な概念であると同時に、歴史的・文化的な概念」であると規定している（中村1984）。

地域史は、地方史と比較すると、中央との対比ではなく、地域住民が自分たちの立場で、その地域の課題に焦点をあてることが特徴である。「地域住民の立場でその課題にこたえる歴史研究」である。この見方は、歴史における当事者性をより重んじている。

こうした歴史学全体の変化にも影響されながら、地域女性史は、「地域における女性」など、従来焦点をあてられてこなかった立場の者が自ら取り組む性格をもった。地域女性史は地域史と女性史の両者の観点から地域の女性たち自身が近現代史の編纂に取り組む歴史学である。

#### 2 女性による女性史研究の萌芽と地域女性史の誕生

女性による女性史研究の萌芽的なものとしては、鶴見和子の「生活を綴る運動」（1952）があげられる。女性が自ら生活を綴るという活動は、こうした時代背景と無縁ではないといえる。

また、1960年代、人生のよりどころとなる生き方を過去にもとめる女性たちが、女性の伝記を綴る人物女性史の刊行が盛んになった。しかし、こうした研究成果は、支配層が特別な才能を開花させた少数の女性の話が多く、一般女性の参考には成り難かった。「権利としての社会教育」や「子育てからの自立を目指した婦人学級」が地域女性史に関心をよせる動きがあるのは1970年代に入ってからであった。

図表1 地域女性史刊行数（折井・山辺2005『地域女性史文献目録』より作成）

	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
前半	1	0	0	1	9	3	17	47	212	247	100
後半	0	1	1	3	0	13	39	121	252	177	2

地域女性史という言葉が定着したのは1980年代である。これは、各地で地域女性史に取り組む女性たちのグループが、互いの活動を報告し合った成果によるところが大きい。地域女性史につながる活動グループで最も古いのが、1956年に愛媛県で誕生した愛媛女性史サークルといわれる。その後、活動グループ8団体の状況が『歴史評論』（1976年3月号）において紹介されたことを契機として、翌年（1977年）には第一回女性史のつどいが開催され、グループ同士が互いに学ぶようになる。

『増補改訂版 地域女性史文献目録』（2005）をみると、1790年代後半以降、女性史研究の成果が

図表2 執筆者属性別地域女性史刊行数（折井・山辺2005『地域女性史文献目録』より作成）

	個人女性	個人男性	女性団体	団体
1900年代前半	0	1	0	0
1900年代後半	0	0	0	0
1910年代前半	0	0	0	0
1910年代後半	0	1	0	0
1920年代前半	0	0	0	0
1920年代後半	0	1	0	0
1930年代前半	1	0	0	0
1930年代後半	1	2	0	0
1940年代前半	2	3	4	0
1940年代後半	0	0	0	0
1950年代前半	1	2	0	0
1950年代後半	5	4	1	3
1960年代前半	5	8	0	4
1960年代後半	7	18	4	10
1970年代前半	12	16	6	13
1970年代後半	45	39	28	9
1980年代前半	75	47	45	45
1980年代後半	100	46	57	49
1990年代前半	81	38	75	53
1990年代後半	71	30	68	28
2000年代前半	31	7	45	17

増加していることがわかる（図表1）。また、これらの成果の書き手を個人女性、個人男性、女性団体、団体の4項目に分けてみると、1960年代までは男性を含む個人の書き手が多く、1970年代後半以降、個人女性と女性団体が増加していることがわかる（図表2）。こうした特徴は、『歴史評論』での紹介や女性史のつどいによって女性史の刊行が活性化した結果と考えられる。「女性が自らの人生や地域の女性のあゆみをまとめ、女性の視点から地域の歴史を考察する取り組み」を地域女性史と定義付けるなら、これらのことが実現し、定着したのは1970年代後半だといえる。

## IV 宮崎における地域女性史

### 1 地域女性史の広がりとは女性史サークル

『増補改訂版 地域女性史文献目録』（2005）は、地域女性史の成果を都道府県別にまとめている<sup>2</sup>。これによると、多い県では100点以上の成果が記載されているが、少ない県では10点未満とその数に大きな開きがある（地域別文献の総数は1276編）。

その理由としては、第一に、書かれる歴史的項目が特徴的な県（例：太平洋戦争において戦場となった沖縄県、アイヌの歴史を残そうとする活動がすでに盛んな北海道など）とそのような傾向ではない県があること、第二に、目録作成の方法が各県の男女共同参画に関する部署および「女性史研究サークル」へのアンケートによることが主であること（県の担当部署が地域女性史の成果物を

把握しているかどうか、また女性センター等との連携があるかなどが回答に反映される）が考えられる。

こうした理由も含めて目録に記載される成果数に差が生じることの背景に、いわゆる「女性史研究サークル」の有無、またその数と活動が関係していると考えられる<sup>3</sup>。成果の多い北海道、沖縄県、広島県、愛媛県、富山県などに共通する特徴は、複数の女性史研究サークルの存在である。

女性史サークルによる地域女性史への取り組みは、その地域が持つ歴史的背景や、地域で伝えていくべき事柄・取り組むべき課題の掘り起こしなど多岐にわたる。また、その取り組みの過程において行政との連携や、女性センター等との関わりによって成果物が社会的に発信されることとなる<sup>4</sup>。

### 2 宮崎における地域女性史の成果

『増補改訂版 地域女性史文献目録』（2005）の地域別文献目録において、宮崎県の地域女性史の成果をみると、以下の4件である。そのうち女性の書き手によるものは2件である。

宮崎県は全国的にみて、把握された地域女性史の成果の少ない県であることがわかる。

＜『増補改訂版 地域女性史文献目録』（2005）地域別文献目録 宮崎県＞

- ・黒木清次 1971『日向の女』五月書房
- ・宮崎県総合博物館編 1985『おんな－明治・大正・昭和に生きた日向女性の喜びと悲しみ』宮崎県総合博物館
- ・木村樹子編著 1988『いのち輝く－高鍋高等女学校生・戦争体験の記』鉾脈社
- ・宮崎県地域婦人連絡協議会編 1993『平和－語りつぐ母たちの祈り』鉾脈社

しかし、これらは、この目録作成にあたり把握された成果のみである。この他にも県内には地域女性史の成果が存在している。ここでは、平成21年8月現在、宮崎県立図書館に所蔵されている書籍の一部を紹介する。（＊句集、歌集を除く。）

- ・鬼塚栄子編 1978『国富町婦人会のあゆみ』国富町婦協歴代会長会
- ・児玉一枝 1982『婦協と私 日向市婦協30周年』
- ・新納仁 1994『村は終わった 最後の人となった房子』日本図書
- ・宮崎日日新聞都城きりしま茶の間会 1995『戦後50年特集号 さざんか』
- ・ホームホスピス宮崎 2005『話しておきたい、私のこと 宮崎聞き書き隊選集』
- ・宮崎傷痍軍人会・同妻の会 2000『傷痍軍人の戦記 妻の手記』

他にも婦人会が発行しているものなど多数の成果が現存する。これらを体系的に把握し地域の

財産として広く知らせていくことも課題の一つである。

## V 地域女性史への取り組み

### 1 愛媛県松山市における女性史サークルの活動

地域女性史への取り組みには、女性史研究グループ（いわゆる「女性史サークル」）による活動の功績が大きいことについては前述のとおりである。

そこで、本研究では、女性史研究グループの活動が盛んで、日本で最初の女性史研究グループがある愛媛県松山市の女性史研究グループにインタビュー調査を行なった。

#### ■ 調査概要

愛媛県松山市にある2つの女性史研究グループのメンバーに、活動目的、活動内容、活動の歴史とその成果についてインタビュー調査を実施した。

- ・調査対象 女性史サークル（愛媛）（代表 結城千恵美氏）のメンバー  
堀江女性史サークル「文月」（代表 高橋昌美氏）のメンバー
- ・調査地 愛媛県松山市近代史文庫会館内
- ・調査日時 2008年11月3日～2008年11月4日

#### ■ 調査結果

##### <女性史サークル（愛媛）>

1956年に松山市に発足、以後現在まで活動。会員数延べ50人程度。松山市内の女性教員などをメンバーに、篠原勝氏（歴史学）を中心に活動を展開。全国女性史のつどいに先駆けて、愛媛女性史のつどい、四国女性史のつどいを開催。週2回程度勉強会を行なう。会報「むぎ」（年一回）の発行を行なっている他、社会活動（成果発表等）を行なう。『愛媛の婦人戦後30年の歩み』（1976）など数々の成果を出版している。

「ここに生き、住み、働き、学び、闘い、ここを変える」の標語を掲げ、地域住民として、女性として地域の問題に取り組んでいる。また、「ここ」を明確に「地域」ととらえて、「地域」と「地方」を混同することを批判している。

##### <堀江女性史サークル「文月」>

1985年に、松山市堀江地区に発足、以後現在まで活動。会員数8人。堀江地区に住む女性たちと井上啓氏（書道教師）により、女性史成果の精読を中心に活動。自分たち自身の歴史の記述も行なう。女性史サークル（愛媛）と連携して社会活動（女性史のつどい等）を行なうこともある。会報

「文月」（年3回程度）の発行を行なう。

これら2つのサークルは、通常は別々に活動しているが、メンバー同士も互いに連絡を取り合い、学び合う関係である。研究発表など活動によっては連携して行なっている。

このように、地域に住む女性がサークルで互いに学び合い成果を共有するだけでなく、それぞれの活動をサークル同士が共有できる関係にあることが、地域女性史の活性化につながっていることがわかる。

### 2 宮崎における女性史サークルの取り組み

本研究の試みとして、宮崎における女性史研究グループの試みを行なった。まず、平成20年度に筆者が行った宮崎公立大学自主講座「社会人のための女性学講座」において、地域女性史に関するトピックを紹介した際に、地域女性史に関心を持つメンバーを募り、平成20年12月より女性史研究会を発足した。

平成20年度における女性史研究会の主な取り組みは、女性史の学習において基礎となる女性学、および聞き取り調査の手法についての学習である。女性学については、女性学の前身である女性運動についてまとめられた『いのちの女たちへ』（田中2004）の精読を通して、女性が主体となることについて学び、聞き取り調査の手法については、ライフストーリー法の意義と調査の際の留意点についての確認等を行なっている。

これからも女性史研究会を継続して開催し、宮崎における地域女性史の編纂に向けて活動を行なっていく予定である。

## VI おわりに

本稿は、地域女性史に関する先行研究の概観と、宮崎における地域女性史の現状把握、宮崎における女性史研究グループである女性史研究会の立ち上げの経過についてまとめた。今後、女性史研究会は、宮崎市を中心とした宮崎県内の地域女性史の掘り起こし、編纂作業を経て、成果物として宮崎における地域女性史の記述を発表したいと考えている。

本研究が研究方法として採用しているライフストーリー法は、個人の生活構造・生活世界に焦点をあてるため、地域女性史に適した方法である。また、この方法は、対象者自らが自らの語りによって自らを癒し、人生の意味付けを再確認する過程でもある。女性が「自分も歴史をつくる一員である」という自覚を持つ側面もある。

また、地域女性史への取り組みは、女性が主体形成を行なう過程であり、「ハーストーリー」としてのハストリーから歴史を再構築することである<sup>5</sup>。その意味でも地域女性史は、地域の歴史の保存という意義があるといえる。また、女性の視点からの地域の課題の発見は、女性が自分自身も

歴史の主体であることを自覚することにつながり、男女共同参画社会の推進にも貢献できる。本研究を通して、宮崎地域の学術、教育、産業、行政、暮らしなどの振興に寄与したいと考える。

---

<sup>1</sup> 宮崎の女性史資料の保存については四方（2006）。

<sup>2</sup> この目録は、国および各都道府県の女性政策担当部署、地域女性史研究会へのアンケート調査（2002年10月～2003年2月）によって作成されている。締め切りまでに回答があったものの中で8項目にわたる目安で地域女性史と判断したものを収録している。よって、地域女性史文献の全て網羅されているわけではない。

<sup>3</sup> 女性史研究サークルの数については、折井・山辺（2005）地域女性史文献目録「地域女性史研究会一覧」による。それによると113団体が掲載されている（2005年5月現在）。

<sup>4</sup> 1980年代に入ると、国際婦人年の影響により、自治体が女性政策を策定するようになり、その政策の一環として女性史編纂が行なわれるようになってきた。1980年代から1990年代にかけては地域女性史、とくに自治体が企画する女性史が盛行したが、21世紀になって減少傾向にある。これについて、折井（2005）は、「まだまだ女性史は歴史の中にきちんと位置づけられているとはいえない。それは地域史の中でもまったく同じである。「つけた史」程度に女性の項目を設けているところはあるが、企画の段階から女性が参画し議論したうえで構想を練っている自治体史がどれだけあるだろうか。」と問題提起している。

<sup>5</sup> 米田（2001）は、これまでの歴史＝ヒストリーが「ヒズストーリー」であったとすればハーストリーとしての「ハストリー」をつくろうと思いを述べている。

## <参考文献>

古庄ゆき子 1987『女性史論争』 ドメス出版

伊藤 康子 1992『女性史入門』 ドメス出版

村上 信彦 1970「女性史研究の課題と展望」（『思想』1970年3月号）

水田 珠枝 1973『女性解放思想の歩み』 岩波書店

中村 政則 1984『近代日本と民衆』 校倉書房

長野ひろ子 2006『ジェンダー史を学ぶ』 吉川弘文館

折井美耶子 2001『地域女性史入門』 ドメス出版

折井美耶子、山辺恵巳子 2005『増補版改訂 地域女性史文献目録』 ドメス出版

鈴木裕子監修 1998『日本女性運動資料集成』 不二出版

桜井 厚・小林多寿子 2005『ライフストーリー・インタビュー』 せりか書房

四方 由美 2006「女性の戦時生活体験―宮崎県における女性史史料保存の意義」（宮崎公立大学

『地域を創る：新しい宮崎をめざして』 鉾脈社）

田中 美津 2004『増補改訂版 いのちの女たちへ』 現代書館

上野千鶴子 2002「歴史学とフェミニズム―「女性史」を超えて」（上野千鶴子『差異の政治学』 岩波書店）

米田佐代子 2005「女性の歴史 ハーストリーをつくる」（総合女性史研究会編『女性史と出会う』 吉川弘文館）

